

医師のコラム

「めまい」のあれこれ。

朝霞台中央総合病院
耳鼻咽喉科 仲田医師

「めまい」の症状のいろいろ。

「めまい」を訴えて受診される患者さんの症状は、一言に「めまい」と言っても一律ではありません。グルグル回るめまい(回転性めまい)を訴えられる方がいらっしゃいます。いわゆる「めまい」とは、医学的には、この回転性のものをさします。多くものは、耳に原因があり耳鼻科の病気になります。また、グラグラ、ふわふわと揺れるめまい感(浮動性めまい)を訴えられる方がいらっしゃれば、クラツとする立ち暗みのようなめまい感や目の前が一瞬暗くなるようなめまい感(眼前暗黒感)を感じる方もいます。これらの揺れる感じや眼前暗黒感などの「めまい」を「めまい感」と呼んで「めまい」と区別しています。「めまい」を生じると、それに伴って自律神経失調様の症状が出現し、気分不快、嘔気、嘔吐、冷汗、油汗、動悸、不安など種々の症状が出てきます。乗り物酔いの症状とよく似ています。他に、大切な症状としては、頭痛や上手くしゃべれない、顔や手足、体の動きや感覚がおかしいなどを伴う時は、頭からのめまいを疑いますのでまずは頭を診てもらいましょう。



「めまい」は何科に受診すればよいのでしょうか？

これら「めまい」や「めまい感」は、約9割が耳に原因があると言われておりますので、多く場合は耳鼻科で診療を行います。しかし、約1割に脳(中枢:脳の障害や脳血管系の傷害など)の病変や不整脈などの心臓(循環器など)の問題など、耳以外に病気があることとなります。したがって、脳や心臓などに問題が無いかをしっかりと確認するのが重要になります。そのため、脳神経外科、神経内科、循環器内科、整形外科などでの検査、治療が必要になることがあります。

「めまい」や「めまい感」を生じる病気には、どんなものがあるのでしょうか？

耳鼻科の病気としては「良性発作性頭位めまい症」「メニエール病」「前庭神経炎」「突発性難聴」「ハント症候群」などがあります。脳神経外科、神経内科の病気としては、

「脳卒中(脳出血、脳梗塞)」、「椎骨脳底動脈循環不全」「聴神経腫瘍など脳腫瘍」「多発性硬化症」などがあります。循環器科、内科などの病気としては、「起立性低血圧」「不整脈」「低血糖」「貧血」「自律神経失調症」などがあります。他に、整形外科の病気として「脊管狭窄症」「後縦靭帯骨化症」などがあります。

耳鼻科で治療する「めまい」の代表的な病気「良性発作性頭位めまい症」

「めまい」の原因となる病気で最も多いと言われております。寝起きや寝返りなど頭を動かした時に数秒から数分間グルグルと眼が回り、じっと安静にしていると徐々に落ち着いてきます。また、頭を動かすと「めまい」を繰り返します。基本的には、聴こえの悪化や耳鳴りの悪化はなく、吐き気はあっても軽度です。内耳の三半規管の中に入り込んだ砂(浮遊物)が、頭を動かすと、砂がコロコロと動くため眼がまわるというわけです。積極的に頭を動かす運動をして「めまい」に慣らしていくことが、有効な治療となります。したがって、じっと安静にしているとなかなか症状が改善してきません。ただし、頭の病気によって似たような症状も出ることがありますので、必要に応じ頭の検査を行うこともあります。

「メニエール病」

急にグルグルと眼が回り、どちらかの耳に詰まった感じや低い音が聞こえにくい感じがして、耳鳴りを伴うことが多いです。また、めまいと共に嘔吐や吐き気を伴うことがあります。これらの症状を繰り返すことが特徴です。内耳の中の内リンパという液体が過剰になり内耳がむくむこと(内リンパ水腫)が原因と言われております。なぜ内リンパが過剰になるのか、詳細は不明です。したがって、内耳のむくみを取るものが治療となります。また、ストレス、疲れ、寝不足なども症状悪化につながりますので注意しましょう。

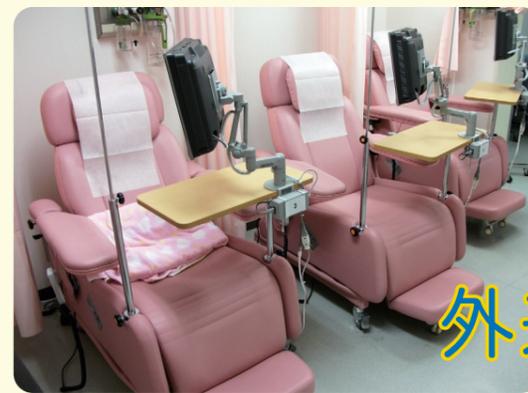
「前庭神経炎」

この病気も急に眼がグルグルと回りだし、吐き気や嘔吐を伴うことがあります。聴こえや耳鳴りの悪化はありません。めまいは、数日間続くことがあります。グルグル回るめまいが治まったあとも、体のふわふわする感じがしばらく残ることがあります。

これは、体のバランスの神経(内耳の前庭や三半規管、前庭神経)に炎症を生じるために起こります。風邪症状に引き続いて起こることが多いです。原因はウイルスによると言われておりますが不明です。激しい「めまい」が取れてきたら、体を積極的に動かし慣らしていくことが大切です。

「突発性難聴」

突然、片方の聞こえが悪くなることで気がつきます。「めまい」がある人と無い人がいます。発症後、数日以内には耳鼻科に受診し治療を受けましょう。1か月以上経過すると治療を行っても聴力改善の見込みは、低くなります。基本的には、片側につき一生で一回の病気と言われております。原因は、血流の障害やウイルスなどいろいろと言われておりますが不明です。



外来化学療法室のご紹介

平成23年2月21日より外来化学療法室が使用可能となりました。お部屋は化学療法(抗悪性腫瘍剤による注射等)をお受けになる患者様のご使用の対象になります。化学療法を行う患者様は白血球が下がり感染を起し易い状態です。今までは注射室にて様々な患者様と同じ部屋で治療を行ってまいりました。外来化学療法室で治療を行うことで、院内で感染する危険性が低くなります。また、化学療法を行う患者様が少しでも快適な環境(リクライニング機能付きベット・液晶テレビの設置)にて、長時間の治療でも出来るだけリラックスしてお過ごし頂けるように整備しました。外来化学療法室では専任看護師、薬剤師、メディカルクラークが、今まで以上に患者様の治療を安全にサポートし、患者様が安心して治療ができるように頑張っています。

